

バレー部史上初の3冠達成

インターハイへさらなる飛躍を誓う



翠巒
Mini Press
第185号
2024/7/19

編集・発行
高崎高校新聞部

6月22日に、令和6年度全国高等学校総合体育大会バレーボール競技県予選会の準決勝及び決勝が、浜川体育館で行なわれた。高崎は準決勝で伊勢崎と、決勝で前商と対戦し勝利した。その結果、高崎は10年ぶり6回目となるインターハイ出場を決めた。また高崎は、2月に開催された新人戦、5月に行なわれた県総体でも優勝しており、今回の大会を含めて、高崎高校バレーボール部で史上初の3冠を達成した。



強烈なスパイクを放つ岩井くん（バレー部より提供）

高崎は準決勝で、伊勢崎と対戦した。高崎は相手にリードを許すことなく優位に試合を進め、第1セットを25-19で奪取し、ストレート勝ちを決めた。

続く決勝では、前商と対戦した。第1セットは、高崎がリードを保ったまま試合を進め、25-19で高崎が奪った。しかし、第2セットでは、高崎が得点をうまく重ねることができず、19-25で前商に取り返される展開となった。

迎えた最終セットでは、高崎がサーブで前商を圧倒し、点差を大きく離して25-15で高崎が勝利し、優勝を決めた。今回の優勝について、バレー

部部長の佐高真翔くん（3の6）は、「10年ぶりの優勝であるためうれしい。大会へ向けて、全員が優勝したいという思いで本気で練習を重ねてきた。それが、今回の結果に大きくつながったと感じている。具体的には、どのような攻撃が相手に通用するか、相手はどのような攻撃をしてくるのかなどを逐一全員で確認するようにしていた。おかげで、試合でも想定外の事態が起こらず、安心して試合に臨むことができた」と話した。

また、高崎が史上初の3冠という快挙を成し遂げたことについては、「部員全員の力のおかげで、成し遂げられたことだと思っっている。部員の皆に感謝したい」と答えた。続けて、「チームの強みを聞くと、「最後までボールを落とさず、エースにボールをつなげることができるのが、最大の強みだ」と語った。

最後に、インターハイへの意気込みを聞くと、「まずは

個人2ペア インターハイへ

ソフトテニス部

ソフトテニスの群馬県インターハイ予選が6月8日に個人戦、12日に団体戦の日程で、ALSOKぐんまテニスコートで行なわれた。



「インターハイに出場する茂木・大河原ペア」と「片貝・田村ペア」(テニス部より提供)

結果は、団体戦が1回戦で沼田に3-0、2回戦で安中総合に2-0で快勝するも、3回戦で農大二高に1-2で惜敗した。個人戦は、茂木俊樹くん（3の2）・大河原兜くん（2の6）ペアが準優勝、片貝匠くん（3の1）・田村真人くん（3の5）ペアが第3位で、インターハイ本選出場となった。

1勝して、決勝トーナメントに進みたい。そして、大会中も日頃支えてくださる方々への感謝を忘れず、部員全員で試合に挑んでいきたい」と意気込んだ。

次に、顧問の砂川先生に話を聞いた。まず、3冠を達成した感想を尋ねると、「バレー部としては全国大会で1勝することを目指して練習を続けてきた。そのために、時期に合わせて自分たちが到達すべきプレートの水準を設定していた。その設定を新人戦や県総体、今回の大会で確実に達成することができたことが、結果として3冠という形に現れたのではないかと思う」と語った。

また、今大会については、「準決勝までは、一定の点差を保ち続けて勝利するという普段通りの試合展開をすることができた。だが決勝では、第2セットで、高崎のプレー以上に前商のプレーの質が高く、タイムを2回使っても、流れを変えることができなかった。メンタルスポーツであるバレーの恐ろしさを痛感した。しかし、そのような中でも、部員たちが主体的に議論を重ね、冷静に試合を分析する姿に安心した。彼らが冷静だったからこそ、最終セットで相手に流れを掴ませずに勝利できた」と感じている」と振り返った。

部の強みについて聞くと、「よりよいチームを作りたいという思いが部員全員に一致しており、互いに切磋琢磨しあえる点や顧問の指示を仰がずとも、自分たちだけで試合の流れをつくることのできる点だ」と話した。（新井そら）

陸上 競歩でインターハイへ

（新井そら）
